研　究　成　果　報　告　書

2023 年 8 月 31 日

１．所属・職・氏名　等

文学部国文学科・准教授・吉田恵理

２．研究課題（テーマ）名

大衆文化としての近現代日本語詩

３．研究期間

2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日

４．利用した研究費の種類及び金額

「若手教員研究促進交付金（合算分を含む）」650,000 円

５．研究の概要

文化としての日本語詩は、歌の文化を隣接領域として大衆文化として形成され、その多くは社会や既存の文学と文化に対するプロテストの意義を有していた。本研究は、大衆文化という観点から戦前期の近代詩および 1970 年代以降のいわゆる詩壇の実質的な解体後の現代詩という裾野の広い詩ジャンルを分析対象とし、そこでどのような日本語詩の表現が生まれてきたのかを明らかにすることによって、既存の詩壇を中心とする近代詩史、延いては小説を中心とする近代文学史を相対化する契機としたい。

６．研究成果等

戦前・戦中期の近代詩から戦後における詩壇の実質的な解体後の現代詩までの射程において、大衆文化として形成されてきた裾野の広い近現代詩を研究対象として文献調査と作品分析および考察を行い、成果を発表した。具体的には、

①近現代文学を研究する学生に特化した卒論マニュアルにおける一章分を執筆した。本書は比較文化の視座を重視した現代的な近代文学研究の手引きであり、近現代詩の研究方法について教示するコラムも執筆した。

②十五年戦争下の国是としての東亜共栄圏建設を寿ぐ戦争詩と位置づけられてきた草野心平の富士山詩について、アジア圏における文化の生成・受容・変容という視野のもとでテクストを読み直し、日本文化や日本語としての富士山が異貌の姿を現す地点を考察した。

③東京書籍が新しい教科書に採録する現代詩人・三角みづ紀の詩について指導書および評価問題の作成の依頼を受け、本研究の計画の一部として当該教材研究を行った。

④前年度に行ったサンリオ文化と文学研究会での口頭発表を基に、山梨県とも縁の深いサンリオが出版し、1974～2003 年の約 30 年間にわたって刊行された雑誌『詩とメルヘン』とその周

辺の文化に関する研究を継続・発展させた。研究成果は次年度に書籍（共著）として刊行する予定がある。

7．研究の実績（論文・発表　等）

【書籍（共著）①】斎藤理生、松本和也、水川敬章、山田夏樹編『卒業論文マニュアル　日本近現代文学編』（ひつじ書房、2022/10）
吉田恵理：「第二章　問題解決のためのアプローチを考えよう」（pp.34-49）
「卒論アラカルト 11　詩」（pp.222-225）

【書籍（共著）②】中林広一編『アジア圏における文化の生成・受容・変容』（御茶の水書房、2023/3 刊行予定）
吉田恵理：「草野心平における「幻象」としての富士山の諸相」（ページ未定）

【その他】石川巧、大原裕治編『占領期の地方総合文芸雑誌事典』（金沢文圃閣、2022/4）
吉田恵理：「埼玉県」（pp.103-109）